

GROUNDSCAPE DESIGN youth 「阿賀に生きる」上映会 感想

■日時：2010年12月19日(日) 15時～17時

■場所：Lab Café @東京・本郷

■参加者：長田嘉晃（GK 設計），島津翔（日経 BP），並木義和（早大），山川健介（国士舘大），金井ゆうた（東大），赤井朋子（ミサワホーム），照井丈大（クリエイト A），伊藤 啓輔（藤村龍至建築設計事務所），大谷友香（東工大），岡田裕司（早大），安藤達也（東大），林佑紀（早大），中村晋一郎（東大），平田有紀（鎌倉市公園協会），伊藤美智子（国士舘），飯沼伸二郎（早大），赤松祐次郎（GK 設計），高野愛子（大成建設），手島史恵（大成建設），宮下真紀子（八千代エンジニアリング） 計 20 名



写真：参加者の面々

「阿賀に生きる」を見て

国士舘大学大学院 山川 健介

小学校の頃 4 大公害病である新潟水俣病のことを知りました。その内の 1 つである四日市喘息は、私の地元である三重県ということから、他人事ではないという記憶を覚えてい

ます。しかし、実際にそこに住む人々が何に苦しみ、その原因を作った会社に対してどのような思いがあるかということを知る機会はありませんでした。

今回の「阿賀に生きる」を見て、今まで想像していた住民とは、違う一面を見ることができました。原因をつくった会社に対して怒りの気持ちもあるだろうが、むしろその会社

を守りたい気持ちがあること。どんなに有害な水銀が流れている川だからといって川沿いを離れることなく、そこに定住し続けていること。そして何より、その地域の人々が元気に明るく生活していることを知りました。ただ、この映画の表向きは、前述した明るい人々の生活風景を映しているのを読み取れるのですが、それだけではなく過疎に悩む人々の姿というものも読み取ることができました。こうした阿賀に生きる人の本当の顔を見ることができたのは、長年を費やして住民の中に入って撮影し続けた結果だと感じました。

「阿賀に行きたい」 -ドキュメンタリー「阿賀に生きる」 を見て

東京大学大学院 安藤達也

「阿賀に生きる」という題名から、阿賀「に」ってというのは、阿賀「という場所に」っていうことなのか、でも単純な位置関係を表しているわけではなくて、寄り添っているから阿賀「とともに」かな、ちなみに英語の題名は“Living on the River Aga”だったから、depend on - などのように「支え合って」、「世話になって」生きるというニュアンス。阿賀野川の恩恵を、時には災いを受けながら暮らすとはどういうことか考えさせられた。

基本的にドキュメンタリーでは、いい悪いとかや、古き良きものを残そう的な価値基準は脇に置いておいて、ありのままを淡々と描き出して欲しいと思う。その点で、新潟水俣病に固執することなく、ニュートラルに川での暮らしを描き出して、それが逆に阿賀野川にどんな過去があったんだろうと知りた

くなった。

一番すごいな、と思ったのはどの方向から風が来ているのかを即座に感じられる川船の船頭の方。海の漁師もそうなんだろうけど、まさに川とともに生きるという印象を受けた。

船大工の遠藤さんの表情も良かった。内匠の技を何気なく映し出していたけど、あれを映し出すのは本当にすごく長い時間がかかるのだと思う。そして、あまりにも気軽に見過ぎてもいけないことなんだと思う。(もちろん映像を見ただけで分かったつもりになるわけでもないけれど。)やはり、実際に登場人物たちや、その背後に流れる阿賀を見てみたくなった。

映画では、流域の何軒かの家々がピックアップされてそれぞれを追っていたが、もっと集落や共同体の様子に分かったら面白いなとも思った。例えば川船漁師達ばかりが暮らす集落ってどんなんなんだろう。見たことないな。

是非また実際に現地に行く機会があればいいと思う。

GSDy サロン「阿賀に生きる」上映会

早稲田大学大学院 並木義和

新潟県、阿賀。と聞くと思い浮かべるのはやっぱり米…だが、実はこれ以外にもずっと深い、川とのつながりのなかで暮らしてきた人々の生活ぶりがあることをこの映画を通して知った。

この映画は公害、水俣病による未認定患者を中心とした暮らしをリアルに切り取ったものだったが、公害という重い問題を真正面か

ら受け止めるには心の準備ができていなかったのが正直なところだ。

川というのはもちろん上流から下流まで一続きの流域という考え方をすべきだというのはどこでも言われていることだが、川を中心とした人々の生活は、その場所や環境によっても刻一刻と変化してきていることを考えると、公害という問題に対しての人々の考え方も現実を見据えることができるかどうかを含めて、非常に難しい問題だろうと思う。

流域の人々が何で生活の糧を得るかということは、個人の思惑や理想だけで語ることはできず、周囲の環境や制約のなかでなされる場合もあるだろう。そうしたときに、以前からの水田や漁業で暮らすことのみを良しとするのか、発電所や工場など近代化のなかで関わりを見出すことをどのように捉えるのか。川の恩恵を受けている点では同様ではあるし、それぞれが幸せな暮らしをしていきたいという思いは同じなのに、被害者・加害者のような関係ができてしまうことについては言葉にならないほどの無力感というかやり切れなさを感じる。

しかしながら、良くも悪くも川との関係のなかで暮らしてきた人々は、これからもずっと川と付き合いいかねばならないということ为前提として考えると、今回映画のなかでスポットが当てられていた、川船をもう一度やるために師匠に弟子入りして懸命に船造りをする人たちや、身体を悪くしながらも二人きりで水田を守り続けようとする農家の人たちの姿が目の裏に焼き付いて離れず、何となくあたたかい気持ちになった。

これらを通して思うのは、川の流域の人々は川との関わりのなかで暮らすことを考えなければならぬということがあるが、では自

分はどうかのだろうか、ということだ。自分は無限に広がるようなもやもやとした世界で、一体何との関係を考えながら生きていくべきなのだろうか。そういったことを考えさせられる実に刺激的な映画だった。

企画をしてくださった中村さん、ありがとうございました。ぜひ春の訪問企画にも参加したいと思っています。

「阿賀に生きる」を観て

GSDy 代表／早稲田大学景観・デザイン研究室
岡田裕司

「阿賀に生きる」を観させて頂いて、早一週間が経つ。記憶が鮮明なうちに感じた事や疑問など記しておくべきだったと少し感じつつも未だにその印象は鮮明である。

僕は中村さんからこの企画を持ちかけられて最初に抱いた印象は、「暗く苦しい公害との戦いを描いた映画」というイメージだった。むろん、水俣病についても詳しく知らぬ若者であり、水俣病の話だよとしか聞いていなかったのも鵜呑みにしていたのである。しかし、実際に観てみるとその印象ががらっと変わった。タイトルにある様に「生きる」という行為の力強さが実に「リアル」に描かれていた。人間の「死」ではなく「生」が描かれている。それも製作に際し、住み込みで撮影を行うことで、阿賀に生きる人々の生活を実にリアルに切り取っていたことに驚きを覚えた。

恥ずかしながら、歴史の教科書で「水俣病」という名前と歴史的出来事として公害があったことしかこの映画を観るまでは僕は知らなかった。もしかするとこのサロンにいた若者の大半がそうかもしれない。「認定」「非認定」

の区別があることも知らなかった。また、発生源地域では加害者であり地域の支えでもあった昭和電工に対するどうしようもない感情を住民が持って苦難していたことも初めて知った。

この映画では様々な立場の人々が登場し、それぞれが公害という事実がもたらした変化に対してその後どのように生きていっているのかが描かれていたと思う。公害によって多くの人が変化を余儀なくされ、怒り、哀しみ、失望し、目から「生」が失われていったのではないかと思う。その様な人々がたくさん居るんだと思う。しかし、それでもなお、力強く阿賀に生きた人々、登場する人物は皆、目が生きていた。この事実を知る事ができたことだけでも、この映画を観させて頂いた価値があったように思う。ここから何を感じとるか。中村さんが観るたびに新しい発見があるとサロンの最後におっしゃられていましたが、僕は一回目にそんな発見をしました。二回目にはどんなことが発見できるのだろうか。

今後、現地見学会など企画としても発展していきそうなので、続編「阿賀の記憶」も時間を見つけて拝見してみたいと思います。

最後に、今回はこのような貴重な場を設けて頂きました中村さん、またそのきっかけをつくって頂いた大熊先生をはじめとした「阿賀に生きる」製作委員会の皆様に感謝の意を述べ、感想文を閉めさせて頂きたいと思います。

「阿賀に生きる」鑑賞後の感想

GK 設計 長田喜晃

この映画を見て最初に感じたのは、ビデオカメラで撮られている人々が、あまりにも自然体だったということ。私が友人のドキュメンタリー映画に出た時は、カメラを意識するあまり、ぎごちなさ全開のまま映像化されてしまった苦い思い出がある。しかし、この映画のおじいちゃんおばあちゃんは、自らに向けられるカメラを異物の存在としてではなく、「この人たちが来ると勝手についてくるモノ」くらいにしか意識していないように思えた。これは製作陣が長い年月をかけて彼らの生活に溶け込んでいったことの表れだと思うし、並大抵の努力ではなかったことは容易に想像できる。

この、自然体をひたすら描写した映像があるからこそ、私は妙な違和感を途中で覚えつつ見ざるを得なかった。なぜなら、高純度で映し出された生活描写の中に、若干かすかな”不純物”が紛れ込んでいることに気づかざるを得ないからである。その”不純物”について、映画は特に言及することもなく、淡々と阿賀の壮大な風景と人々を映し出していく。

公害を最初にクローズアップし、悲惨な被害状況を鑑賞者に伝えたいという人々を映すのではなく、はじめに人々ありきで映像が撮られているため、妙な先入観や憐みの念を持って構えて映画に入り込むということがなかった。これは製作者の意図なのだろうが、とても好感が持てた。NHKの「小さな旅」を見させられているかのような感覚に途中陥ったのも、このせいだろう。

暗いテーマが根底にあるにも関わらず、僕が終始この映画で見せつけられたのは、ひた

むきに生きる人々の前向きな姿勢ばかりだった。久しぶりにほっとする映画を観れた気がする。続編もあるとのことなので、非常に楽しみにしている。

阿賀に生きる —その地に生きること

東京工業大学大学院 大谷友香

川のある地に住むというのは、私の細やかな願いのひとつである。川の近くで育ったわけでもなく、特に川に思い入れがあるわけでもなく、でも何故か落ち着く。そんな場所。

恥ずかしながら阿賀野川についての詳しい事情は知らずに今回のサロンに参加した。阿賀に生きるというのは、愛着を持って生活するというよりもむしろ腹をくくって守り抜くといった印象を受けた。しかしそこには大切な仲間たちがいて、喜怒哀楽を分かち合いながら人生を謳歌していた。

その地には色々な過去がある。例え今が素晴らしい場所でも、悲しい過去があるかもしれない。周辺に住みたいのなら、どんな過去でも背負っていけるだけの覚悟と、数名の仲間を見つけておく必要があるのかもしれない。

阿賀に生きる感想

早稲田大学大学院 飯沼伸二郎

「阿賀に生きる」を鑑賞する前、映画の内容を、新潟水俣病に苦しむ人々を描く重たいテーマのもの、と勝手に想像していた。ところが、映画の中では、病気の後遺症はあるものの、前向きにたくましく生きる人々の姿が

微笑ましく描かれていた。老人夫婦が、畳の部屋で会話をしながらウトウト眠ってしまうシーンでは会場の皆も思わず笑ってしまった。また、撮影側のスタッフの存在感を全く感じないことが新鮮な驚きだった。

彼らが老人達と何年間も寝食をともにして、培ってきた間柄でないとあそこまで自然体な姿を映すことはできないと思う。ドキュメント作品の魅力を存分に感じられる作品だった。本作品を鑑賞して、日本中のどの川にもそれを生業として暮らしている人々の姿がある、ということを確認させられた。

ぜひ機会があれば、次作の「阿賀の記憶」も鑑賞したいと思う。

映画「阿賀に生きる」

(財) 鎌倉市公園協会 平田有紀

わたしは、どこで生きる？

私には、水銀が流れても、流通の便がどんどん悪くなくても、ここまで自分の街を信頼して生き抜ける場所があるだろうか？それともできるのか？

力強く流れる阿賀野川、頼もしく伸びる田畑の緑色、そして阿賀に浮かぶ木製の舟。そしてその大きな原木を削る職人の技と目..

この映画に出る阿賀の人たちの生き方を見て、自然の強さを感じた。そしてその強さにあらがうことなく、そんな自然の上で生きる人の強さを感じた。

つまり、阿賀に生き抜く人たちは阿賀の自然の強さを知りその強さを信じ阿賀に生きていて、わたしはまだ自然の強さを知り得てないのだと思った。

現代の生活では自然の強さを回避するけれど、人の生きる強さも実感しづらい。自然になぞって生きれる生活を羨ましく思うとともに、都市の中でもそれを感じることができるような”公園”のポテンシャルをもっと活かして、伝えていけるようになりたい、と個人的に思うのでした。

無題

東京大学大学院 金井ゆうた

今回、予備知識がほとんどないままでこの「阿賀に生きる」という映画を見たので、正直、予想していた内容とは大きく異なっていて驚きました。新潟水俣病の映画ということだったので、もっと悲壮なものをイメージしていたのですが、実際には、水俣病や、公害という枠組みを超えて、「地域に生きる」というのはどういうことなのかを投げかけてくれた映画だと感じました。

関東生まれ、関東育ちの自分は、東京から遠く離れた地方で暮らすということの実感が、正直言って、リアルな感覚としてはつかみ切れていない部分があると思っています。今回の「阿賀に生きる」は20年以上前の姿ですが、それを少なくとも垣間見る事ができたという意味で、とても貴重な経験となりました。阿賀がその後どのような姿になっているのか、とても興味があります。

仲間とみた「阿賀に生きる」

東京大学 中村 晋一郎 (企画者)

2010年6月の阿賀野川哲学塾でこの映画を観終えたときに、私が最初に思ったことがあります。それは「この映画を仲間と一緒に観たい」ということでした。

今回の上映会に参加したメンバーは全員「GROUNDSCAPE DESIGN youth」(以下、GSDy)という、土木・建築分野の若手が集う団体に所属しています。幸いなことに僕には多くの友人がいますが、この映画と一緒に観たい、いや観るべきだと最初に顔が浮かんだのがこのGSDy面々でした。それは、ここ数年の彼らとの付き合いの中で、多くの議論の時間を共有し、そして彼らを志を共にする「仲間」であると、僕が認識していたからかもしれません。

「阿賀に生きる」の中には阿賀野川を中心とした多くの「仲間」が登場します。それは、旗野さん、長谷川さん、遠藤さんであって、彼らは阿賀野川を共有する仲間であり、そして水俣病に立ち向かう仲間であったと想像します。今回の上映会の参加者の多くが感想として述べた、水俣病という不安や悲しみを感じさせない登場人物の「明るさ」は、きっと彼らに悲しみや苦悩を共有できる仲間がいたからこそありえた表情ではなかったでしょうか。

私が最も印象に残っているシーンに、加藤のおじさんが、自宅で友人たちと飲み、そして皆が帰った静かな自宅で横になっている場面があります。そこで加藤さんは、ぼそっとこう言います。「今日の酒はうまかった。仲間がいてうまかった。」この一言が、この映画に感じる「明るさ」の理由ではないかと思うの

です。仲間がいる喜び、普段は意識しないことですが、実はこのことが、人々の人生において何にも代えがたいものではないか。そして、この仲間の存在の認識が、私たちの前に横たわる様々な世の中の問題解決の糸口になるのではないか。

上映会の最後に、僕は参加者に向けて「この映画は観るごとに新たな発見がある。だから、またどこかで観てほしい。」と話させて頂きました。今回の上映会で私が見つけた新たな発見の一つは、この映画と一緒に観たいと思ひ、そして一つの問題に対して一緒に考えることのできる仲間がいるという事実だったのかもしれない。

最後に、この映画を私に教えて下さった大熊先生はじめ阿賀野川哲学塾の皆様、そして何よりこのような素晴らしい映画を世に送り出して下さった佐藤監督をはじめとする映画関係者の皆様に、心よりお礼を申し上げます。

以下は、新潟阿賀野市出身の島津翔君が上映会開催前にメンバーへ送ったメールの文章です。

ユースの皆さま

お疲れさまです。島津です。

先日、中村さんから連絡があった「阿賀に生きる」の映画サロンについて、言いたいことがあってMLを使わせてもらいます。

私の出身は、阿賀野川の下流部に位置する新潟県阿賀野市です。

家族はもちろん、親戚や友人、恩師なども阿賀野川流域民として生活しています。

新潟に流れる信濃川と阿賀野川を、私は幼いころからライバルだと思ってきました。

信濃川は河口部が新潟市中心部を流れ、新潟市民から「阿賀野川を渡ると田舎になる」と半ば小馬鹿にしたように言われたこともあります。

それでも、信濃川より川幅が広く流れも遅い阿賀野川は、本当に雄大に見えて、私はずっと好きでした。福島ー新潟の県境の山峡では、いまごろきつと紅葉が見事だと思います。

新潟水俣病を知ったのは、恥ずかしながらずっと後でした。

正確には思い出せませんが、恐らく小学校高学年だったと思います。

もちろんその時に水銀が川に流れていたわけではありませんが、阿賀野川水系の川でいつも魚釣りをしていた私は、正直ひどく困惑したことを覚えています。

阿賀野市から上流に行くと、阿賀野川は本当に綺麗です。川に深い緑が写り込んで何と

も言えない色を帯びて、よく見ないと流れているか分からないくらいの水面は、ただただ静かに水を運んでいます。

その水を使って生活している上流部の流域民も多い。みな、阿賀野川の恩恵を受けながら生活しています。

その阿賀野川に水銀が流れたのを知って、大袈裟ですが身が引き裂かれるような気持ちになりました。

先日、機会があつて阿賀野市から数十 km ほどの位置にある水力発電所を見る機会がありました。

近くだと知っていたので、昭和電工の工場も見てきました。

昭和電工の工場とは、廃液としてメチル水銀を阿賀野川に排出した工場のことです。

工場はほとんどが廃墟になっていて、住民の人に話を聞くと、稼動しているのは一棟だけだそうです。

周りの産業はキノコ栽培くらいでしょう。少し歩いてみましたが、なんとなく昔より元気がない気がしました。

それでも、阿賀野川だけは変わっていなかった。本当に綺麗で雄大でした。そのコントラストがすごく不思議で、なんだか悲しかった。

私は、「阿賀に生きる」を観たことはありません。もちろんこの映画のことは知っていましたが、その続編の「阿賀の記憶」とともに、観るのをためらっていたのかもしれない。

すごく貴重な機会なので、是非ユースの皆さんとともに観たいと思っています。

きっと素晴らしいドキュメンタリーなんだと想像しています。

当日は忘年会もあるそうですので、お時間

のある方はご一緒しましょう。

整理されていない文章で申し訳ありません。

島津 拝

以上。